

通信制課程における体育的行事の取組

石川県立金沢泉丘高等学校通信制課程
教諭 高 下 裕 介

1 はじめに

令和2年8月に文部科学省は、通信制に在籍する生徒が調査以来はじめて20万人を超えたと発表した。高校生の17人に一人が通信制に通っている割合であるとも言われる現在、本県でも中学生の不登校の増加については問題となっており、実に26人に一人が不登校生であると言われている。そして、この影響は確実に本校生徒数にも影響しており、生徒数が増加傾向にある。このような状況における保健体育科の取組として、スクーリング時数の確保に重点をおいた「ウォークラリー」と「体育大会」の二つの体育的行事について、実践内容を報告したい。

2 本校の概要

(1) 沿革

本校は、昭和23年に旧制の石川県立金沢第一中学校に通信教育高等学校部として付設された。翌年、石川県立金沢泉丘高等学校と改称し、7月より面接指導が開始された。当時は戦後の混乱期で、施設・設備は不十分、教員配置もわずかで教科書もないような状況で、実際は開店休業状態であった。その後、開講科目を徐々に増やすものの、通信教育だけでは卒業に必要な単位数の修得ができなかった。第1回の卒業式が昭和33年3月であるのはそのためであり、卒業生はわずか2名であった。昭和38年からはNHK学園高等学校の協力校となった。この頃は、高度経済成長期であり、地元の紡績会社の集団生を受け入れていた。昭和55年には石川看護学院（石川県総合看護専門学校）との技能連携による衛生看護科を設置し、看護師の育成を担うことになる。また、能登地方では過疎が進み交通機関が不便となる中、生徒が通学しやすいように、平成11年に七尾城北高校（定時制）の校舎を借りて七尾サテライト校を開設した。近年では、平成30年に通信制課程70周年記念学園祭を開催した。

(2) 本校の特色

本校の特徴等を箇条書きにすると次のようになる。

- ① 石川県内唯一の公立通信制高校である。
- ② 北陸地方では唯一のNHK学園高等学校の協力校である。約40名の生徒が通学している。
- ③ 普通科と衛生看護科がある。令和2年、衛生看護科に6年ぶりに1名入学。卒業生は20名。
- ④ 能登地区に七尾サテライト校を設置。約30名が通学。
- ⑤ 年間19回のスクーリングと、学園祭や隔年の修学旅行等の「特別活動」を実施している。
- ⑥ 部活動としての活動はなく、年間3回程度LHの時間に自由参加で同好会活動をしている。転学生の中には部活動で活躍していた生徒もおり、卓球や柔道、バドミントンなどでは定通制全国総体で優勝者も出ている。
- ⑦ 定時制通信制生活体験発表会では3年連続県大会で優勝し、県代表として全国大会に出場している。

(3) 学校行事と同好会活動

① 学校行事

- 5月 体験学習スクーリング（近辺へのバス旅行）
- 7月 校内生活体験発表会
北陸三県交歓会（富山県・福井県・石川県の県立定時制高校が交代で主催する）
- 9月 修学旅行（東京方面・隔年実施）
- 10月 県定時制通信制高校生活体験発表会「青春のこだま」
体育的授業「ウォークラリー」
- 11月 学園祭
- 12月 体育大会（ボッチャなど）、ブックトーク

②同好会

運動系…バドミントン、バスケットボール、ソフトテニス、卓球、陸上競技、柔道
文化系…茶道、イラストレーション、フラワーアレンジメント

(4) 生徒の状況

①在籍数と活躍生数 [令和2年 10/31 現在] ()内は在籍数

年次	男	女	計
1年次	43 (43)	52 (52)	95 (95)
2年次	49 (54)	72 (72)	121 (126)
3年次	60 (71)	96 (110)	156 (181)
4年次	61 (278)	47 (242)	108 (520)
計	213 (446)	267 (476)	480 (922)

*活躍生数 / 在籍数 = 52.1%

*就業状況…未就業：約5割 定職：1割弱 定職以外の就業：約4割

②活躍生の年齢構成 [令和2年 5/1 現在] 活躍生 436名

年次/年齢	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳～
1年次	72	3	2	0	0	1
2年次	96	6	2	0	0	1
3年次	130	9	3	1	0	1
4年次	35	65	6	2	1	0
計	333	83	13	3	1	3
割合%	76.3%	19.0%	3.0%	0.7%	0.3%	0.7%

③近年の入学者の動向について

令和2年度の入学者の特徴は、1年生で中学校卒から入学した新卒者が前年より倍増(21→41)したことである。このうち9割の生徒は計画的に学習を進めている。さらに9月転入生も1年生の割合が最も多く、過半数をしめる結果となっている。石川県では26人に一人が不登校生であるとのデータを考えれば今後もこの傾向は続くと思われる。

また、近年、県内公立高校のいわゆる進学校からの転編入が増加傾向にあり、ほとんどの生徒が何らかの問題を抱えて入学している。休学を含む欠席が30日以上ある生徒は約8割、通院の経験のある生徒が約4割、人間関係のトラブルやいじめにあった生徒も5割弱である。SNSによる誹謗中傷に傷つき不登校となって行き場を失った女子生徒というのが最近よくあるケースであり、転入生の約6割が女子生徒である。

入学者の推移

年度	入学者数	新入 (内 新卒)	編入	転入
H29	171	39 (20)	25	107
H30	169	30 (16)	21	118
R1	192	40 (21)	22	130
R2	189	57 (41)	11	121

3 保健体育科の現状

(1) 体育の受講状況

体育は、7単位を必修修単位としており、科目として、「体育①」「体育②」「体育③」（各2単位）「体育④」（1単位）を開講している。（重複受講可）日曜・月曜それぞれ13回のスクーリングを行っており、必要面接（スクーリング）時数は体育①②③は10時間、体育④は5時間である。日曜日に出席者が集中する傾向はあるが、全日制と体育施設を共用しているため、月曜日には、全日制の授業との重複を避けるため、同一時間帯（月曜第3限）に複数の体育科目を実施せざるを得ず、時には100名を超える生徒数で授業を行う場面があるが、体育施設が全日制（1学年10クラス）の規模であるため（第1・第2体育館・卓球場・グラウンド）、生徒の活動が大きな制約を受けるほどではない状態である。

年度当初にはオリエンテーション授業を行い、それ以降は晴天時にはウォーキング（2.5Km）・ソフトボール・テニス、雨天時はバスケットボール・卓球・バドミントンから時間ごとに選択させて活動している。

令和2年度、新型コロナ関連の休校により、スクーリング回数が日・月各10回に減ったため、体育においては必要時数を約半数にする対応をとり、実技時にはマスクを外させるが、十分な換気を確保した上で周囲との適切な距離を意識させる指導を行った。種目の変更はせずに、極端な接近や身体接触を避けるため、個人技能の練習を中心に実施した。

レポート提出枚数は、体育①②③は各4枚、体育④は2枚であり、体育分野のすべての単元（体育理論を含む）を学習できる内容となっている。試験は、前期にレポート内容から出題する筆記試験（7～8月）を実施し、後期は実技試験（11～12月）を行っている。

受講者数

科目	R1	R2
体育① 2単位	137	143
体育② 2単位	174	177
体育③ 2単位	148	169
体育④ 1単位	103	115
計	567	604

(2) 体育受講状況の問題点

下表は、近年の受講状況の概況である。レポート提出率、スクーリング出席率、単位修得率のいずれも上昇傾向を維持しており、まじめに学習に取り組む生徒数の割合が増えていることを現していると考えられる。しかし、レポート提出率と比較すると、スクーリング出席率が低く推移しており、そのことが単位修得率の低さに影響していることがうかがえ、体育実技を苦手とする生徒の存在を反映していると思われる。

また、体育を複数科目受講している生徒（令和2年は133名）と、9月転入生（令和2年は44名）を合わせると177名、全受講者の38%となるが、これらの生徒は、年間のスクーリング必要時数の確保について、十分な計画と努力を要する。体育実技を苦手とする生徒の増加傾向とも併せて、必要時数確保のための何らかの支援が必要な状況が近年継続している。

体育受講概況（体育全体：レポート[R]提出率・スクーリング[S]出席率・単位修得率）

年 度	R 提出率	S 出席率	単位修得率
H29 (2017)	73%	62%	52%
H30 (2018)	76%	66%	58%
R 1 (2019)	80%	73%	60%
R 2 (2020)	87%	84%	72%

4 体育的行事の取組

(1) 体育的行事の経緯

昭和38年に運動会として始まった体育的行事は、何度か実施形態を変え、平成30年から現在のウォークラリー（10月）と体育大会（12月）にいたっている。いずれも生徒のスクーリング時数の確保に重点をおきながら、体力向上や生徒間の交流を深めることによる学校の活性化をねらいとしてきた。

現在は、参加した生徒には、ウォークラリーは体育時数1～2時間、体育大会は特別活動時数1時間または体育時数1時間が加算されることになっている。

体育的行事の現在までの経緯

昭和38年～平成6年	10月	校内運動会（綱引・パン食い競争・片足平衡立等）
平成7年～平成17年	10月	日曜ソフトドッジボール大会 月曜ボウリング大会
平成18年～平成29年	10月	ウォークラリー（5.5 km）
	12月	ボウリング大会
平成30年～令和元年	10月	ウォークラリー（5.5 km）
	12月	体育大会（ボッチャ・バドミントン・卓球）
令和2年～	10月	ウォークラリー（5.5 km・3.0 km：新設）
	12月	体育大会（ボッチャ・バドミントン・卓球）

5 ウォークラリーの取組 [当初は2時間加算→現在は1～2時間を加算（令和2年に見直し）]

(1) ウォークラリーの概要

学校を出発し、本校南東部に位置する大乘寺丘陵公園を目的地とし、途中に設けられたチェックポイントを通過しながら、約1時間30分で学校まで往復する行事である。

出発してから約20分は学校周辺の勾配のない住宅地を進むが、その後、丘陵公園にさしかかると約20分間の緩い登りが続く。このあたりからは眼下に校舎も目視できるようになり、金沢市街地のはるか先に日本海も望むことができる。最上部付近で小休止の後、復路となる。

なお、行事当日は、誘導やチェックポイント、安全確保のためのコース上の配置など、全ての教員が何らかの役割を担っている。

近年のウォークラリー参加者数

年度	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年
参加者数	85	108	126	37

(2) 問題点と改善策

行事開始から令和元年までは全体育受講者から無条件で参加者を募り、5.5 kmのコースで実施していたが、実施回数を重ねるうちに次のような問題点が見えてきた。

問題点…①運動不足で、筋力や持久力が低いレベルの生徒がほとんどであり、なかには完歩できずリタイヤする生徒が見られた。この場合、スクーリング時数は全く加算されないばかりか、本人は大きな挫折感を味わうことになる。また、近年、不登校傾向などの問題を抱えた生徒が増加傾向にあり、それに伴う体力低下によってリタイヤする生徒が増えることが予想される。

②参加生徒数の増加により、隊列が大変長くなる。コース上には交通量の多い箇所（山側環状道路など）がいくつかあり、生徒の安全確保のための教員配置に余裕がなくなる。（全教員19名、うち1名は体育非常勤）

③ウォークラリーに参加すると、時数が加算されるので、通常のスクーリングを軽視するケースもある。（例：行事当日の体調不良で欠席、計画していた時数確保が困難になる。）

これらの問題点を踏まえ、令和2年度より、次のように行事の見直しを行った。

改善策…①体力に自信がない生徒や、体育実技が苦手な生徒が、気軽に参加し、完歩を目指せるように、従来の5.5 kmのコース（Aコース）に加えて、3.0 kmのショートコース（Bコース）を設定する。

②安全確保の観点から、参加生徒の人数を若干でも抑えるため、スクーリング時数の確保

を迫られている「9月転入生および体育複数科目受講生」に限って参加を募る。

③Aコース(5.5km)は2時間、Bコース(3.0km)は1時間を体育時数に加算する。

(3) 令和2年度ウォークラリーの実施 [10月26日(月)9:30~12:00]

9月入学生・体育複数科目受講生のみに参加を限ったことに加えて、新型コロナによるスクーリング回数の減少に伴う必要時数軽減により、参加者数は大きく減少し、37名であった。(Aコース31名、Bコース6名) そのうち、9月転入生は18名(49%)、体育複数科目受講生は19名(51%)となった。雨天時の教室でのビデオ視聴も準備していたが、当日は薄曇りの好条件に恵まれ、絶好のウォーキング日和となり、同行する教員が熊除けの鈴を携行して出発。生徒も明るい表情でほどよいペースで歩き続け、隊列もコンパクトに収まった。大きなトラブルもなく、A・Bコース全員が完歩した。

事後アンケート(複数回答可)では、

- ・参加した理由 … 「時数確保」9割、「運動不足解消」5割、「楽しそう」2割弱
- ・コース選択理由 … 「時数確保を優先」8割強、「体力に自信あり」2割
- ・事後の感想 … 「運動不足解消」9割、「楽しかった」5割、
「生徒間の交流できた」2割、「先生と交流できた」2割
- ・来年の行事に … 「参加したい」5割、「わからない」5割

などであり、感想(自由記述)では、

「大乘寺山からの景色がきれい(複数)」、「ほどよい距離だった」、「運動をするきっかけになった」、「思っていたより長く歩けた」、「引きこもりには良い運動だった」

など、肯定的な意見が多く寄せられた。

6 体育大会の取組 [特別活動1時間あるいは体育時数1時間が加算]

(1) 経緯と概要

過去、何度か実施形態が変化しているが、平成7年から平成29年まで実施していたボウリング大会は、利用していたボウリング場が閉鎖になったことで内容の見直しを行い、現在の、体育大会(ボッチャ・バドミントン・卓球)となって、令和2年で3回目となった。(ボッチャの用具は石川県障害者スポーツ協会より有料で借用)

ボッチャは、重度脳性麻痺者や四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツで、東京パラリンピックの正式種目である。誰でも気軽に楽しめることに加えて、オリンピック・パラリンピックの開催を控えたタイミングで、生徒に少しでも大会への関心を持たせたいという思いから導入を決めた。

近年の体育大会参加者

年度	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年
全参加者数	41	52	40	35
種目別参加者	ボウリング41	ボッチャ14	13	12
		バドミントン23	16	12
		卓球15	11	11

(2) 令和2年体育大会の実施 [11月30日(月)14:30~16:00]

参加者数は、35名(ボッチャ12、バド12、卓球11)であった。そのうち9月転入生は6名、体育複数科目受講生は14名であり、参加者の57%となった。

全体の開会式、準備運動の後、各種目に分かれて競技を行った。初めは若干よそよそしい雰囲気もあったが、徐々に打ち解け、時に大きな歓声もあがり、互いにアドバイスし合うなど、普段の体育スクーリングではあまり見かけない様子もあちこちで見られた。

一方で、参加してみたものの当日集団の中には入れず、退出してしまう生徒がいて、担当者が対応する場面もあった。

事後アンケート(複数回答可)では、

- ・参加した理由 … 「時数確保」7割、「楽しそう」4割、「運動不足解消」4割弱

- 「先生と交流したい」 2割弱、「生徒間の交流をしたい」 1割
- ・ 種目選択理由 … 「好きな種目」 5割強、「興味があった」 4割弱（特にボッチャ）
- ・ 事後の感想 … 「楽しかった」 8割弱、「運動不足解消」 5割、
「生徒間の交流できた」 2割、「先生と交流できた」 2割
- ・ 来年の行事に … 「参加したい」 7割、「わからない」 3割

などとなり、ボッチャ参加者のみに「オリ・パラへの関心」を尋ねたところ、9割の生徒が「関心が高まった」と回答した。

また、感想（自由記述）では

「ルールが易しくて楽しかった（ボッチャ複数）」、「普段できない競技ができて良かった（ボッチャ複数）」、「思っていたより複雑で楽しかった（ボッチャ）」、「特活と体育が同時にカウントされるので助かる」、「思わず熱が入り、疲れた」、「みんな上手い！」

など、ウォークラリーと同様に肯定的な意見が寄せられた。

7 課題と展望

令和2年度は新型コロナ関連の休校に伴い、スクーリング必要時数を軽減したことで、体育的行事への参加者は減少したが、今後、必要時数が通常に戻れば、参加者数は増加することは確実である。

ウォークラリーについては、新コースを設定したばかりであり、次年度も現在の取組をそのまま継続し、予想される参加者の増加に備えるため、コースや当日の教員配置を検証し、有意義で安全な行事になるように準備を進めたい。

体育大会に関しては、現在ボッチャ・バドミントン・卓球の3種目での実施が継続しており、ようやく軌道に乗った状況である。これについても取組を継続しながら、ボッチャに続く新種目を模索していきたいと考える。

ウォークラリーと体育大会の二つの体育的行事は、特に9月転入生や体育複数受講生にとって、スクーリング時間数を加算できる貴重な行事となっている。また、他人との交わりを苦手とする生徒にとっては、自分一人のペースで歩けばよいウォークラリーは比較的参加しやすい行事であろう。そういった生徒が時数の確保を迫られた場合には、個々の状況に応じて、教師側からの「参加してみたら？」といった声かけや慎重な後押しが必要であろう。

また、参加後のアンケートによれば、「楽しかった」と回答した生徒が二つの行事ともに過半数を超え、「他生徒と交流できた」・「先生と交流できた」が同じく2割強の回答となっている。参加する生徒は、時数確保を最優先しながらも、楽しさや他生徒や教員との交流、運動不足の解消などを求めて申し込み、また実際に参加して、楽しさや交流ができたことを実感している。生徒間の交流の場でもある二つの行事を今後も工夫しながら継続していきたい。

今後、この二つの行事のさらなる充実を模索する中で、「時数確保」のためだけでなく、「運動の楽しさ」や「人との交流」を目的として行事に参加することで自分に自信をつける生徒が増え、スクーリングを苦手とする生徒の減少につながればと願う次第である。